

## コロナ禍における自然・緑とのふれあい

愛甲 哲也\*

〔キーワード〕：花卉園芸，公園緑地，子ども，遊び

## 1. コロナ禍の緑の需要

新型コロナウイルス感染症の蔓延は、私たちの日常生活に大きな影響を与えた。農学分野のなかでも、花卉園芸生産物の流通や販売、公園や緑地の利用も大きく変化をしつつある。本報告では、コロナ禍において園芸の生産と消費、造園空間の利用と管理に、どのような影響があり、関係者や市民がそれにどう対応してきたか概観し、今後の展望と課題について述べる。

花卉をはじめとした園芸作物は生活を彩り、冠婚葬祭にも欠かせない。それらを飾り、育てる園芸活動は、人々の生活に彩りと潤いを与え、生活の質を向上させる（松尾，2005）。新型コロナウイルス感染症の蔓延は、花卉をかざる空間やイベント、活動の場をうばった。人々が集うイベントや施設、店舗の休止や閉鎖は、花卉類の販売に大きな損失をもたらした。花卉園芸の消費や園芸活動の発展をうながすイベントなども、つぎつぎと延期や中止に追い込まれた。札幌市では、市民の目を楽しませていた大通公園の花壇コンクールやライラック祭り、花フェスタも中止、またはオンライン開催となり、公園の様相も一変した（写真1）。2022年6月には、恵庭市で全国都市緑化北海道フェアが予定されており、関係者は感染状況が落ち着くことを願いながら、準備をすすめている。

その一方で、家庭菜園用の種苗や資材の販売、切り花・鉢花の個人消費は堅調もしくはコロナ前を上回る傾向もみられた。コロナ禍でステイホームを強いられた人々が家庭菜園を熱心に行ったため、種苗の不足も起きたと報告されている（Bulgari et al., 2021）。我が国でも、ホームセンターやオンラインショップにおいて、苗や園芸資材の売り上げが2020年の2月から前年を上回っていた（岡田，2020）。



写真1 人影もまばらな2020年6月の札幌市大通公園

外出も制限され、買い物も不自由になった結果、家庭で野菜や花を育てることが安全な食料を手に入れる手段になると同時に、健康的な余暇を過ごす趣味ともなった。農林水産省や日本の園芸会社などによって、家庭における花卉の消費をうながすキャンペーンも実施された。その成果もみられ、自宅に花を飾りたいという意向や、実際に花を飾る頻度も増えたという。コロナ禍は、これまでの園芸作物の生産、流通、消費を、量的のみではなく、質的にも変えていこうとしている。

## 2. 公園利用の変化

コロナ禍は、市民の屋外での生活やレクリエーション活動にも大きな影響を与えている。在宅勤務が推奨され、通勤時間がなくなり、余暇の時間は増えた。しかし、緊急事態宣言により、図書館や美術館、体育館などの多くの公共施設は閉鎖された。都市における市民の身近なレクリエーション空間である公園においても、遊具の使用停止、屋内施設や駐車場の閉鎖、花見の禁止などが相次いだ（写真2）。公園そのものを一時的に閉鎖した自治体もあった。公園には、マスクの着用、ソーシャルディスタンスなどを呼びかける看板も立ち並んだ。しかし、その



写真2 花見による立ち入りを禁止した札幌市円山公園

結果として、公園全体の利用が減少したわけではなかった。

イベント広場や集客施設のある公園で利用者が減少したのに対して、住宅地にある身近な公園や、郊外にある公園では、利用者が増加した（竹内・久間, 2021）。海外においても、都市のロックダウンの実施や、ステイホームが推奨されているなかで、都市近郊の緑地や歩道の一部では、歩行者や自転車の数が増加したとの報告もある（Doubleday et al., 2021）。

リモートワークや休校で在宅時間が増加し、海外や都道府県をまたぐ旅行に制約があるなかで、居住

地の近郊でアウトドアレクリエーションへの参加者が増加していた。札幌市の市街地から近い藻岩山、円山、三角山、手稲山などの登山者数を、携帯電話端末のGPS位置情報をデータ化したKDDI Location Analyzerを用いて分析した（図1）。都心部からのアクセスもよい藻岩山と円山では前年比130%の増加がみられ、三角山と手稲山では200%以上の登山者数の増加がみられた。藻岩山と円山は、地下鉄とバス停からも近いため、もともと登山者数も多い。それに対して、三角山や手稲山で登山者数が増加したのは、出かける場所を選ぶ際にも混雑を避けようと登山者が考慮した可能性がある。実際に山を歩くと、すれ違う際に距離をとるといった行動の変化も多くみられた。

### 3. 子どもの自然とのふれあい

2020年春に、コロナ禍の影響を最も受けたのは子どもたちだっただのではないだろうか。学校や幼稚園が閉鎖され、家にいることが求められた。当初は、外出してもよいかどうか、近所の公園ですら利用してよいかどうかわからない状況で、保護者にも戸惑いがみられた。遊びの経験は、子どもの認知的、身体的、社会的、感情的な幸福に貢献し、子どもの全人的な成長に欠かせない（Ginsburg, 2007）。北海道では、2020年2月28日に独自の緊急事態宣言が発

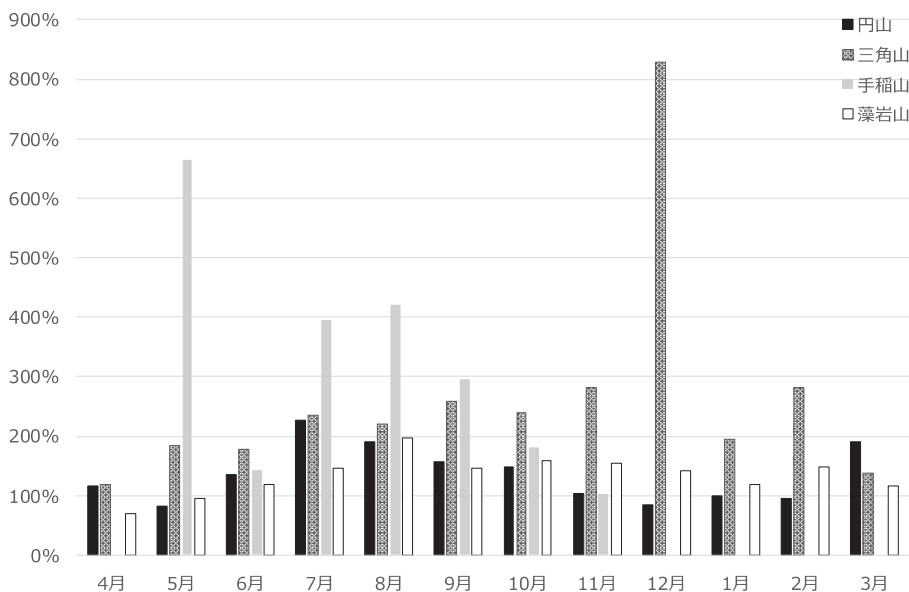


図1 札幌市近郊の2020年の登山者数の前年比

令され、知事は学校に休校を要請し、5月末まで小・中・高・幼稚園が休校となった。3月2日には、総理大臣がすべての小・中・高校の休校を要請した。3ヶ月に及ぶ学校閉鎖により、子どもたちの外出や身体活動が制限され、生活習慣や発育、精神面に大きな影響を与えたと考えられる。そこで、子どもたちの生活や外遊びがどのように変化したのかについて、2020年3月から未就学児と小中学生の保護者にオンラインアンケートを、こども環境学会や私立幼稚園協会などのメーリングリストやソーシャルメディアを通して呼びかけて実施した。ここでは、4月1日までの923件の中間報告をもとに結果を紹介する(愛甲, 2020)。

回答者の子どもが通う学校・幼稚園・保育園のうち、8割以上が休園や時間短縮を行っていた。保護者の労働条件を考慮して、施設の運営を継続している園もあった。約半数の保護者は、もともと専業主婦・主夫や自営業、在宅勤務だったが、約半数はこれまで通り仕事を続けていた。それらの家庭では、学校や幼稚園、保育園が休みの間、子どもの世話をすることが課題となっていた。学校や幼稚園、保育園が閉鎖されたため、子どもたちは室内でゲームやテレビゲームをしたり、テレビやインターネットの動画を見たりと、室内での活動の時間が増えていた

(図2)。塾や美術・音楽教室、スポーツクラブなども閉鎖された。子どもたちは、外で遊ぶなどの屋外活動に費やす時間が減った。その結果、友達と会う機会も減ったが、家での会話は増えた。

コロナ禍の遊び場を、コロナ前と比較した(図3)。子供を外で遊ばせない親もいた。屋外で遊ぶ場所としては、自宅や友人宅の庭や近所の公園が多かった。また、パンデミック前と比較して、山や川や野原、道端や駐車場で遊ぶ子どもの数がやや増加した。子どもたちは、遊ぶ公園を選ぶ際には、家の近くにあること、広い公園であることを重視した。

このような状況で、子どもが屋外で遊ぶ必要性については、屋外での遊びをいつもと同じように必要だと考えている保護者は57%、いつもより必要だと考えている保護者は26%だった。一方、「いつもより少なくてもいい」「外遊びは必要ない」と考えている保護者は約15%だった。さらに、子どもの生活や遊びについてどのような情報が必要なのかを聞いた。半数以上の保護者が、子どもが屋外で安全に遊べる場所についての情報不足を経験していた。子どもを外出させてもいいのかわからない、外出させるときに気をつけることなどの情報を求めている保護者も多くいた。悩みや不安としては、「室内でしか遊べないとストレスがたまる」「感染症が心配

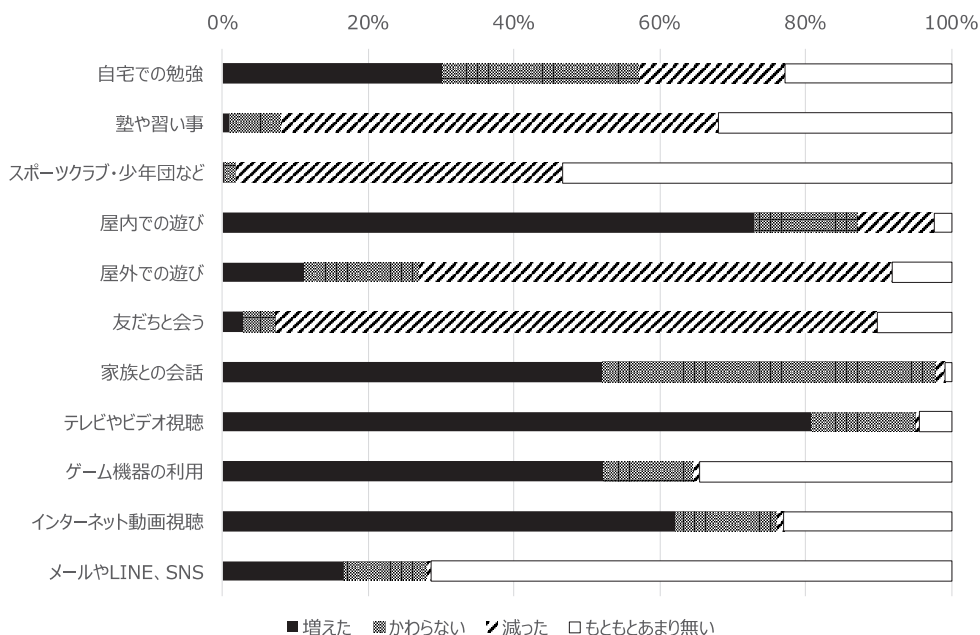


図2 コロナ禍の子どもの生活時間の変化

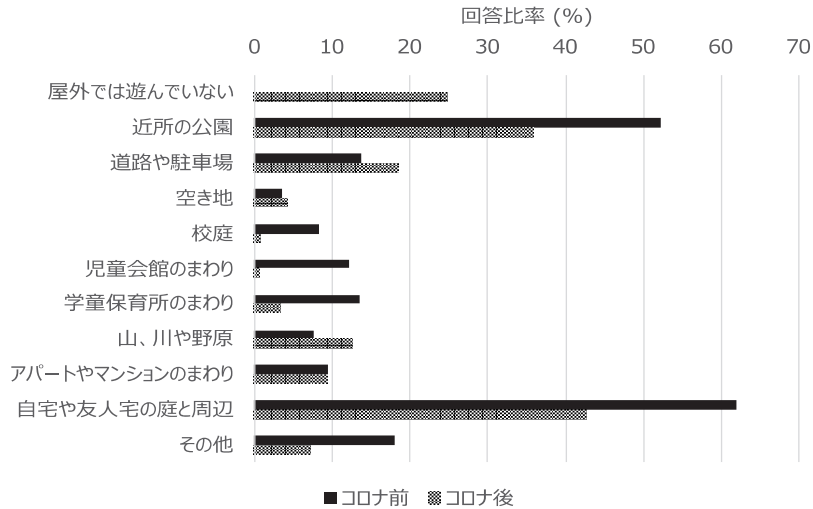


図3 コロナ禍の子どもの生活時間の変化

「親がいないと外で遊べない」「人混みが気になる」「外に出ると周りの目が気になる」など、親も子どももストレスを感じていることがわかった。このような不安を解消するために、休校中に子どもがリズムを崩さないように、遊びや勉強の時間を確保し、運動も入れた時間割をつくるなどの工夫をした保護者もいた。普段はできないような時間のかかる工作や料理をする親子や、人の少ない場所を探して外で遊ばせてもいた。

子どもの屋外での遊びに対する親の態度によって、子どもの行動がどのように異なるかを比較したところ、子どもの外遊びに否定的な親の子どもは、あまり外で遊ばず、家の庭や近所の公園で遊んでいた。一方、子どもの外遊びに肯定的な親の子どもは、家の庭に加えて近所の公園や道端、山や川などで遊ぶことが多かった。また、積極的な保護者ほど、安全な屋外の遊び場に関する情報を求めている。しかし、外遊びに対する考え方にかかわらず、親は子どもを外で遊ばせてよいかどうかの判断には苦慮していた。

#### 4. これからの自然・緑とのふれあいについて

上述したような園芸作物に対する需要の変化、緑地における利用者の行動の変化は、一過性のものなのか、それとも今後もその傾向が継続するか、その予測は難しい。新型コロナウイルス感染症の収束にはあと2~3年は要するという予測や、完全に収束

することはなく感染症対策を前提とした社会・生活の変革が求められるとも考えられている。

花や緑のもつ癒しの効果は、このコロナの影響で注目され、その需要も高まるだろう。リモートワークや休校で在宅も増え、外出もままならない中で、花を飾る、植物を育てることがストレスの軽減につながった方も少なくないだろう。園芸生産・流通においては、冠婚葬祭や贈答に依存していた構造から、個人・家庭での消費、オンラインでの販売などに対応した変革が求められるだろう。住宅の庭や市民農園といった小規模なレベルでも使いやすく、初心者でも取り組みやすい工夫などが求められる。花を飾る、使う場面も様々で、新たな楽しみ方が提示され、より市民の生活に寄り添ったものになるだろう。今回のような社会の急激な変化、多様化する消費者のニーズに、きめ細かく対応できる生産、経営へのシフトが進む可能性がある。

公園・庭園の利用は、その傾向が大きくこれまでと異なったことが世界中で報告されている。大規模なイベントが行われる都市中心の公園から、住宅地内の公園、郊外の緑地や山などで利用者が増加した。イベントや団体利用は減少し、個人や家族単位の利用が増え、密をさけて行動できる場所が求められる。アウトドアレクリエーションへの関心も高まり、登山やキャンプ用品の売り上げも好調なようだ。一方で、初心者が増えることでの遭難事例の増加も懸念されている。このような変化に対応した空間の提供

も求められる。少子高齢化、財政の縮減で行われていたコンパクトシティや公園の機能統合などの施策を見直す機会にもなるだろう。狭い都市に人々を密に居住させることは、インフラの維持管理の効率化や経済効率を高めることには役立つが、感染症流行の危険性を高める。この間に普及したリモートワーク、オンライン授業は、人が集まる空間、そこに移動する手段に対する考え方を変えつつある。住宅地内に点在する小規模な公園は、地震や火災などの災害の発生時にその存在価値が見直されるが、今回もその絶好の機会となった。私たちの生活は、もっと空間的、時間的に、隙間や余裕があってよいはずだ。硬く隙間の少ない都市構造を、緑や花が柔らかく余裕があり、急激な変化や非常事態にフレキシブルに対応できる構造に変える可能性を持っている。

政府からの急な要請により休校で在宅を強いられた子どもたちとその保護者の困惑は、大きかった。休校が3ヶ月間続いたため、子どもたちの発達への影響が懸念された。ほとんどの子どもたちは自宅の庭や近所の公園で遊んでいたが、自然環境の中で外遊びをする子どもが増えた。子どもも保護者も、人の多い地域を避け、郊外の山や森、川など、密度の低い場所を求めている。その一方で、この状況下でも外遊びの必要性は多くの保護者に認識され、それぞれが様々な工夫を行って、子どもたちのからだところの健康の維持に取り組んでいた。求められていたのは、安全・安心に外出して遊べる場所だった。いくつかの公園では、過去の利用状況から、混雑する日や時間帯を予測したカレンダーを公表し、混雑しない日や時間帯に来園してもらう取り組みを行った。住宅地内の公園でも、早朝、昼休み、夕方には混雑せずに利用することができる。この予測も、日頃のモニタリングがあってこそ可能になる。公園の管理者には、来訪者の調査を行い、そのデータをもとに予測を立てることの重要性が再認識される機会になったのではないだろうか。保護者は、自分の住んでいる地域にどのような公園があり、子供が

どこで遊んでいるのかを知らないことも多い。例えば、札幌市では、市民が様々な要素を指定して、公園を検索できるウェブサイトを提供している。子どもたちが遊べるような人混みの少ない公園や自然の遊び場、外出時の留意点などの情報が休校の要請とともに発信されていれば、保護者と子どもの戸惑いも少なかっただろう。

コロナ禍は、公園や花壇、遊び場、緑地の維持管理にも大きく影響した。市民や利用者、民間事業者がボランティアで管理に関わっている場合も多く、それらの活動やイベントも延期や休止が相次いだ。植物は生長し、野生動物は活動し、利用者もそれなりに訪れる。コロナ前でも高齢化や人材不足、予算難に苦慮しており、今後の活動の継続が難しくなることも考えられる。通常時にはあまり注目されることのなかった維持管理の体制の脆弱さも、今回のコロナ禍で明白となった。体制の再構築、支援が求められている。

#### 参考文献

- 松尾英輔 (2005) 園芸福祉はいまー誕生、現状、そして、展望：園芸学研究 4 (4) : 373-378.
- Bulgari, R., Petrini, A., Cocetta, G., Nicoletto, C., Ertani, A., Sambo, P., Ferrante, A. & Nicola, S. (2021). The Impact of COVID-19 on Horticulture: Critical Issues and Opportunities Derived from an Unexpected Occurrence. *Horticulturae*, 7(6): 124.
- 岡田準人 (2020) コロナ禍における人と緑の関係―家庭での園芸活動に着目して―. *日本緑化工学会誌* 46 (2) : 194-195.
- 竹内智子・久間亜紀 (2021) COVID-19 対策下の東京における大規模公園の利用制限の実態と利用者数の変化. *ランドスケープ研究* 84 (5) : 479-484.
- Doubleday, A., Choe, Y., Busch Isaksen, T., Miles, S., & Errett, N. A. (2021) : How did outdoor biking and walking change during COVID-19?: A case study of three US cities: *PLoS one*, 16(1): e0245514.
- Ginsburg, K. R. (2007). The importance of play in promoting healthy child development and maintaining strong parent-child bonds. *Pediatrics*, 119(1): 182-191.
- 愛甲哲也 (2020) 「新型コロナウイルスの影響による子どもの生活と遊び状況調査」中間報告：北海道大学プレスリリース 2020年4月6日, [https://www.hokudai.ac.jp/news/pdf/200410\\_pr.pdf](https://www.hokudai.ac.jp/news/pdf/200410_pr.pdf)